JAハリマ管内での宍粟市親子わくわく体験旅行

主席研究員　重頭ユカリ

1　宍粟市親子わくわく体験旅行

９月下旬の秋晴れの日、兵庫県宍粟市（しそうし）の山間の畑には、大きなサツマイモを掘り出した子どもたちの歓声が響いた。JAハリマの管内で催された「宍粟市親子わくわく体験旅行」に参加したのは、JA兵庫六甲の組合員・利用者である親子30数人だ。

2　きっかけは信連のプロジェクト

今回の農業体験旅行は、兵庫県信連の管理職向け人材養成プログラム「未来塾」でのプロジェクトがきっかけとなった。企画を発案したのは、「地域活性化へのJAの取組み」をテーマとするチームである。

舞台となった兵庫県宍粟市は、2005年４月に４町の合併で誕生したが、16年に人口が４万人を切り、市民と危機感を共有するため、市長が人口減少非常事態を宣言するに至った。

JAハリマも、地元電鉄会社と組み、農業体験企画を数年間実施するなど、これまでにも地域活性化のための様々な取組みを行ってきたが、なかなか面的に広がらないという課題があった。今回、信連からの発案を受け、役職員、組合員、さらには行政の協力も得て、このプロジェクトに取り組むことになった。

他方、体験旅行の参加者はJA兵庫六甲の神戸元町店の組合員・利用者のうち、18年に新たに新店舗が開設される御影地区周辺に居住する人々である。既に貯金や貸出、共済でJAと取引をしているが、管内でも特に都市的な地域在住のため、農村部のようにJAと様々な面で関わりを持つことが少ない。新たに開設される店舗ではより関係性を強め、農業に対する理解を深めてもらいたいという願いをこめて、参加者を募った。

したがって、今回のイベントは、農村部への人の呼び込みと、都市的な地域の在住者とJAとの関係性強化という二重の目的があった。この目的を達成するため、両JAと兵庫県信連、宍粟市は延べ17回もの打合せや事前準備を重ね、参加者が楽しみながら、地域や農業への理解を深められる工夫をこらした。

3　宍粟市・JAファンを増やすプログラム

参加者は、神戸市内をバスで出発し、JAハリマ本所からほど近いサツマイモ畑に向かった。宍粟市の福元市長からの出迎えを受け、宍粟市が琵琶湖とほぼ同じ大きさで、９割を山が占めることが紹介され、JAハリマの上野組合長、兵庫県信連の中村理事長からも歓迎を受けた。自治会長や農会長をはじめとする地元の農家の方々からは、サツマイモの保存方法について説明を受けた。

畑は、農家やJA、信連の職員により下草がきれいに刈られ、さらに昔ながらの焼き芋の作り方を披露するため、もみ殻のくん炭器も用意されていた。子どもたちは、最初はおぼつかない手つきで芋を掘り始めたが、農家の方から「芋の下の方を持って揺すると取れやすいよ」等のアドバイスを受け、みるみるうちに上達した。子どもの顔ほどの大きな芋も多く、「こんな大きいサツマイモは初めて見た」という声があちこちであがった。

次にバスが向かったのは、30分ほど離れた

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/

大きなサツマイモを掘る参加者

原不動滝公園だ。バスの中では、総務省が募集した宍粟市の地域おこし協力隊として活動する加藤智子さんが、宍粟市でのエピソードを紹介してくれた。加藤さんは、宍粟市に来てから狩猟免許をとり、撃った鹿を自分でさばくアクティブ派で、子どもたちからのリクエストで、鹿の角やなめした皮も披露された。

アマゴ(魚)つかみ体験では、素早い動きで逃げる魚を追うため、見ず知らずの子どもたちも互いに協力しあっていた。ほとんどの子どもが素手で魚を捕まえるのが初めてであり、お尻がぬれるのも構わず、夢中で魚を追いかける姿が印象的だった。

昼食はバーベキューだったが、アマゴや焼き芋、JAハリマの職員が作った管内産の新米を使用したおにぎりも振る舞われた。新米のおいしさに、１人で４個もおにぎりを食べた女子小学生もいて、お母さんも驚いていた。昼食後は、掘ったサツマイモのなかから、３kgに近い重量を選んだ親子が勝ちというコンテストが開かれ、上位者にはJAハリマの新米が贈られた。また、協力隊の加藤さんが宍粟市にまつわるクイズを出し、市のマスコット「しーたん」も登場すると、参加者は大いに盛り上がった。

その後、満腹のおなかをさすりながらも、同農園のリンゴ畑で、参加者は自分でもいだリンゴにかぶりついた。そしてJAハリマの直売所「伊和の里」に向かうバスの中では、当日直売所で使えるクーポンと、12月末までに再訪した際に使えるクーポン券が配られ、参加者は買い物を楽しんだ。当日は、地元マスメディアからの取材もあったが、参加者は口々に「宍粟市にまた来たい」「仕事があれば宍粟市に移住したいぐらい」と答えていた。

筆者がJAとの関わりについて保護者に話を聞くと、「JAでは貯金を利用していたが、子どもの小学校入学時に子ども共済の案内をもらったので加入した。以前からJAを身近に感じてはいたが、今日のイベントでさらに身近になった」「来年近くにJA兵庫六甲の新店舗ができるようなので、楽しみにしている。まだJAを利用していない家族や友人にも利用を勧めたい」との声が上がった。

4　持続性のある取組みとするために

旅行では、豊かな自然の中で地元の農家や地域の人と触れ合えたことが、参加者には貴重な体験だったことが感じられた。地域活性化や利用者との関係性強化は、短期間で達成できるものでないため、参加者がJAや地域に対して感じた親近感を持続させられるかが重要である。今回構築されたJA、信連、行政のネットワークをもとに、参加者向けに引き続きイベント情報を発信するなどの働きかけを行う必要があるだろう。比較的若い親世代も多かったため、SNSの活用も想定できよう。また、今回参加していない人にも旅行の模様をレポートしてJAのイベントの楽しさを伝えることは、次回以降の参加を促すことにつながるであろう。

（しげとう　ゆかり）